

運命

講談社

© Fumio Niwa 1970

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は

お取り替えいたします

運 命

昭和四十五年二月二十日 第一刷発行

著 者 丹羽文雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二一二

郵便番号 一一二

振替 東京三九三〇

電話 東京(九四二)一一一一(大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社大製

定 価 七百六十円

0093-123736-2253 (0)

目次

松の影	7
妹	15
茶の間	92
世間の目	127
青空	159
礼子の日日	176
事故	240
ところ	250

男友達

285

酷暑

326

秋

355

声をかける

367

新装

386

飽和状態

396

その時

414

附記

421

装
幀
香
月
泰
男

運 命

松の影

一

ゴルフ場のみどりの芝生に、松の影がながく落ちていた。空は黄金のかがやきであふれていた。陽がようやく夕陽に移りかかる時間であった。ひろいゴルフ場には、プレーヤーのすがたがなかった。大きなわずれものをしたように、自然は静かであった。ゴルフ場をとりまく周囲には、車が走り、家々のたえまのない生活の物音がつづいているのだが、この世界だけは別であった。多くのゴルフファーがひきあげたあとである。練習場のグリーンにも、たれもあらわれない。夕陽は樹木の影をみどりの芝生にきざみつけるように落している。さわやかな風が吹いていた。

「静かだ、すばらしい眺めだ。私はゴルフ場の夕方のこのいつときが、何よりも好きだよ」

クラブの食堂のテーブルで、一色宗有とその子の直之が、向きあっていた。直之の方が色が白い。父の宗有にくらべて、陽焼けがしていないのである。一色宗有の顔は生

地の色か、六十八歳という年齢の色か、陽焼けのせいかわからなくなっている。目鼻立ちのはっきりした顔であった。たれも六十八歳とは思わない。

「ハンチングをかぶっていられると、直之さんの兄さんのようですわ」

と、キャディがいうのも、決して誇張ではなかった。一色宗有はゴルフをするとき、まっ白のつばのひろいハンチングをかむった。特別誂えのハンチングであり、一年に三つも四つも使い古した。白いハンチングすがたが、一色宗有のトレード・マークになっていた。とおくからでも、そのハンチングの格好で一色宗有とわかるのだった。戦前からのゴルフファーで、ハンディは八つであった。直之は、やっとハンディキャップが十になったところである。研究所に通っているので、父のように気の向いたときにゴルフ場に出かけるわけにいかなかった。

「いい景色ですね。静かで、きれいで、心の中にも焼くような眺めです。ぼくも、このいつときが好きですよ。芝のみどりはあくまで強いみどりで、松は濃く、幹は黒々としていて、バンカーの砂はあくまで白く……印象的ですよ」

「いつみても、夕方のゴルフ場の光景はすばらしい」
宗有は、ハイボールを口にしていた。直之はビールをのみながら、ときどき、食堂の入口の方に目をやった。たれかを待っていた。

一色宗有は、自分を迎えにくる千晴のことは思い出しもしていないようであった。やがて、千晴の、年齢よりは地味づくりの和服すがたがあらわれるのである。直之は千晴を待つ思いで、何となく胸が苦しくなってくる。自分が待っているのではなかった。千晴が迎えにくるのは、父である。「章子とゴルフをやることはすくないようだね」と、父がいった。

「章子は姉さんとやっています。女同志の方が、うれしいんですよね」

と、直之が答えた。

「困った女房連だ。細君がゴルフに熱中すると、家庭はほり出されてしまう。亭主は犠牲になる。そのくせ陽には焼けることをおそれて、顔や手や足を出来るかぎり包んで、窮屈な格好でやっている。あれで何が愉しいのかね。やるくらいなら、陽焼けを覚悟してやるべきだ。やらなければ、徹底的にやらない方がいい。千晴はやらないよ。いくらすすめても、やらないよ」

「その方が利口ですよ」

二十五歳の千晴なら、すこしばかり一色宗有の手ほどきをうけたなら、その相手がつとまるのだが、

「スポーツは、苦手ですわ」

と、断りつつけていた。

「女が陽に焼けると、男の顔より汚くなるね。どうしてかね。男の顔は、陽に焼けてもそれなりに立派だが、女の顔はふだん化粧品でいたためつけているから、皮膚が陽焼けに對抗が出来なくなっているのかね」

直之は、千晴の、青白いような肌を思い出した。ぬめつとしたような皮膚であった。隠花植物を聯想させるものがあるが、といって病的というのではなかった。一米六十二、三はあるだろう。撫肩で胸のあたりはむしろすいくらいであるが、痩せているのではなかった。濡れたような黒い眸は、どのような小さい感情も巧みに表現するようである。大柄といってもよい体に似合わず、声はあまかった。

その千晴が、食堂の入口にすがたをあらわした。いつも一色宗有を迎えにくるので、食堂のマスターや女従業員などとは顔なじみである。会員の中でも、顔なじみが多い。千晴はテーブルの中で、一色親子をさがしていたが、見つけるとその方に白い足袋をちらちらさせて近付いたが、途中で会員や給仕女と挨拶を交わした。

「お迎えにまいりました」

千晴はいい、直之に微笑してみせた。

千晴があらわれると、食堂もそのあたりが一段とはなやいだように見えた。年配の会員たちは、羨し（うらやま）そうに一色宗有と千晴に視線をおくる。二十五歳だが、三十五、六のきものを着ている。が、十歳も背のびしていることが、逆に千晴の若さをひきたてていた。髪にはあまりウェーブもかけず、束髪にして大きなまげをつけている。顔がからだと比較して小さかった。黒のハンドバッグをもっていた。

「何かのむか」

「私、レモン・ジュースをいただけかしら」

千晴が顔をあげると、待ちかまえていたように女給仕が近付いてきた。

「いつみても、この時間のゴルフ場の美しいながめが、心にきざみこまれるようですわ」

「いまも直之と、そのことを話していたところだ。ひろいゴルフ場が無人の世界になっている。夕陽があらゆるものの輪廓をはっきりと浮き出している。明るい夕陽の色だ。そのくせ熱さをすこしも感じさせない。つぎの瞬間に暮れかかるが、いまがいちばん明るい時間ではないかね」

直之は微笑をうかべて、父のそばにかけている千晴の顔をながめていた。千晴はそれを意識しているらしい。が、いつものことで、こだわることはなかった。

「このひとも足が丈夫になったよ。はじめはハーフをついて歩くのが、せいっぱいだったけど、このごろは、ワン・

ラウンドを結構ついてもわるようになった」

と、宗有が笑う。

「足が、つよくなりましたわ。足の裏が固くなりました」千晴も笑う。

「いろんなコースをまわってるんでしょうね」

直之が訊いた。

「ひとりでは退屈なんでしょう。私という見物があると、プレイするにも張合いがあるんですのね。私もだいたい、ゴルフのルールがわかるようになりました。ついて歩いていても、失敗なさると、自分のことのようにがっかりしますわ」

宗有は苦笑した。

「ギャラリーがいた方がいい。若いころは、ギャラリーが一人でも多い方が、いいショットをしたものだよ」

「ぼくなんか、いまでも、ギャラリーがいたら、ちびんてしまします。しなくともいいチヨロを出したりして……」

「ゴルフは皮肉なくらい、そのひとの性格をあらわすものだ」

「お父さんは磊落（らいらく）な性格だから、プレイも磊落（らいらく）だけど、ぼくのは小心翼（しんよく）々型ですよ」

「いいえ、直之さんのはすなおで、球筋がいいんですって……」と、千晴がいう。

直之は父とゴルフをすると、何となく庄倒されるのだっ

た。

四

直之は、千晴に対して一線を画しているが、その一線が十分納得できない状態にあった。父一色宗有は六十八歳であり、千晴は二十五歳である。二十五歳の男と六十八歳の女が夫婦になることはほとんど考えられないことであり、いつかも世界的なニュースになっていくくらいである。が、二十五歳の妻と六十八歳の男との結合は、大して不思議でもないのである。四十三歳も年齢の相違があるが、直之の目には、ふたりの仲を不自然には感じなくなっていた。直之は千晴より五つも年上である。妻の章子も、千晴より三つ年上であった。

が、千晴は一色宗有の法律的な妻ではなかった。それを知りで、千晴が一色家にはいつて来た。もちろん直之たちとは別居生活である。

後座妻とは、生活の知恵が考え出した一つの手段であった。地方によっては後座配ともいわれる。千晴がそれであった。夫婦の形ではあるが、正式の結婚ではなかった。だから男が死亡したとき、後座妻はあとくされなく、その家から出ていくことが約束であった。いつかその家から出ていくことが契約となっているので、それまで老人の面倒をみてもらったという謝礼を出すことになっている。その報

酬金も、最初のときに契約される。後座妻は、妻の役目も果たし、主婦ともなり、一家の責任者ともなる。息子や娘たちの家庭との交際にも、すこしも卑下する必要はないのだ。いわば後座妻という一種の職業ゆえ、家族関係は割り切れているのが特色であった。男が死んだところで、人情にからんだごたごたは起らないのだ。老人のもとに年の若い女が後妻におさまるのでは、あとに面倒な問題がひかえる。が、後座妻はそれを前もって清算してかかるのである。

千晴が後座妻となって、一色宗有の邸にあらわれたとき、直之は千晴をみて、おどろいた。信じられなかった。そういう役割は、半ば付添看護婦であり、家政婦であり、老人の茶のみ友達であった。

——あまりに若すぎる。そして美しすぎる。

と、直之は動揺した。千晴を後座妻に迎える工作は、直之のまったく知らないところではこばれていた。

五

もしも一色宗有が正式に妻を迎えるといひ出したならば、家族の気持は硬化したにちがいない。

「いったいお父さんは、自分がいくつになっているか知ってるの。世間に対して恥しいわ」

まっ先に反対するのが、長女の真弓であるのはわかって

いた。一代で一色印刷株式会社を今日の大にした宗有は、実権を娘婿の狩野正毅にゆずり、会長の位置についていた。直之は学者肌で、父の仕事をつがず、植物学を専攻し、現在三千坊研究所に通っていた。勝気な真弓は、六十八歳になっても異性を必要とする父の人生をみとめるわけにはいかなかった。二男一女の母親である真弓は、狩野家の人間となつてからも、実家に対する発言はつよかった。それには、直之の妻の章子が、義姉の気持におもねるところがあり、真弓の性格はつのるばかりであった。

「お母さんなんて、いまさら私たちに呼べる？ たとえどのようなひとが来ようと、私たちとは赤の他人だわ。それを法律的にしばらくられて、母親扱いをしなければならいなんて、まっぴらよ」

直之夫妻も、義母の出現は困ることであつた。ふせぐことが出来るなら、あらゆる手段を講じて父の欲望を阻止したい気持であつた。

「秘書の下里の話によると、会長は正式の後妻でなく、後座妻を考慮されているということだ」

と、狩野から知らされると、肉親はほつとしたものである。

「後座妻なら、話は別よ」

と、真弓がいった。

「いずれお父さんの面倒はたれかを見なければならぬの

だ。お父さんと同居は窮屈だと、章子さんもいっていることでもあり、君だっていやだろう？」

狩野正毅が妻に笑つていった。

「六十八にもなりながら、女がほしいというような男性は、たとえ父親でも、同居はいやですすよ」

「だから、この際後座妻をみとめてやり、そのひとにお父さんの一切を任せたら、一挙兩得ではないか。こちらとは没交渉になるし、お父さんはその女性と愉しく晩年をおくることになるのだ」

真弓も直之たちも、父の後座妻になる女は、いずれ五十を越えたひとと思つていた。

「それが今年二十五歳の方です」

秘書に知らされたとき、真弓は、

「二十五歳ですって？ 私より年下？」

と、事実とはうけとれなかった。

六

「会長は、前からそのひとをご存じだったのです」

秘書の下里がいった。

「父がどうしてそんなひとと、つながりがあったのかしら。素人のひと？ それとも、くろうと？」

「それが、れっきとした素人の方でございます」

「父がくろうとの女を相手にしていることは、これまでに

もたびたが耳にしたけれど、一色印刷の社長ともなれば、花柳界でそういうひとを押しつけられることもあるうかと、私たちは気にしてなかったのよ。でも、素人とは、おどろいたわ。二十五歳というと、結婚の経験もないひと？」

「いいえ、その方は一度結婚されました。主人とは死別で、子供もなく、実家にかえっていられたのです」

直之は、下里からおなじことを報告されたとき、

「結婚の経験があるとはいえ、二十五の若さで、よく六十八の男の後座妻におさまる気持になれたものだね。何かそこに深い事情があるのではないか」

まだ見ぬ二十五歳の女性に同情をした。

「お父さまが亡くなられたときの謝礼金がめあてなんでしょう」

妻の章子は、あっさりと言付けた。その金がすでに先方に渡されているのではないかと章子は思った。

「どうして父がその女を知ったのかしら」

「お知合の結婚式に招かれた席で、偶然社長のお目にとまったのです。もちろんそのときは、結婚されていました。瀬名カメラの若奥さまでした」

「瀬名カメラ？ 瀬名といえば、破産をして、一時新聞に大きく報道されていたのをおぼえているよ。破産から社長がノイローゼになって、ビルの六階からとび下り自殺をしたということだったが……。その方の奥さんだったひとか」

「会長もそのニュースをおよみになって、大へんショックをおうけになりました。その後そのひとがどのような生活をしているか、気にしていられたようすです。その方の実家が米津といって、電気器具を販売しておりましたが、母親が相場に手を出して、家も手放さなければならなくなりました。会長はそういうことまで、いつたれに調査させていられたのか、よくご存じでした」

一色宗有の途な情熱は、また一色印刷を今日の隆盛にもつてきた大きな原因でもあった。直之は、父のやり方を恥しいとは思わなかった。自分にはない性質が羨しかった。

「どういう手段をおとりになったのか、会長がその方に直接お会いになりました」

七

そのとき父と千晴のあいだにどのような話があったか、直之は聞いていない。秘書の下里も知らない。が、田園調布の一色宗有の邸に千晴を案内してきたのは、下里であった。千晴は訪問客のように、一色邸にはいった。きものや服は最少限度にして、あとから届けられることになっていた。

直之夫婦も、田園調布に住まっていた。父の家とは、五、六丁はなれていた。姉の真弓夫婦は、父の家よりは直

之の家に近かった。

一夕、父が直之夫婦を夕食に招いた。また別の日、真弓夫婦を父が招いた。それは父と千晴が数日関西から北陸をまわって帰京してからであった。

「このひとが、今度私の面倒をみてくれることになったのだ。千晴さんという」

父に紹介されたときの鮮烈なおどろきを、直之はわすれていない。妻の章子も、千晴の若さにぎょっとしたふうであった。五十年配の女を想像していたからである。後座妻が父の家にはいり、父について旅に出たことは聞いていたが、たれも千晴の描写をしてくれなかった。千晴の若さと美貌にふれることを、父の周囲のものはおそれていたようであった。

が、直之のおどろきと、章子のおどろきとは内容がちがつていた。いかにも女らしいものを直之は感じた。そのとき千晴は、地味な和服だった。女中といっしょになって動いていた。一色宗有の妻の席にすわったという感じではなかった。気の利いた、若い家政婦といってよかった。宗有や直之夫婦の席に、つとめて永居はしないようにふるまっていた。一色宗有に対しても、距離をおいているようであった。それは四十三歳という年齢のへだたりでなく、主人と家政婦の距離に似たものであった。

そのかえりの車で、章子が、

「二十五歳にしては、万事心得てゐるって感じを受けましたわ」

「三年も結婚生活の経験のあるひとだから、一応は心得てゐるだろうね」

と、あたりさわりなく直之は答えた。

「お父さまが亡くなったとき、それまでの年月に應じて慰籍料を支払うのでしょうか？」

「慰籍料は、おかしいよ。何というのかな、つまり報酬金だろうね」

「あの若さでは、六十をすぎた後座妻に報酬金を出すようには出せないでしょうね。だって、ちっとも同情がわかないもの」

千晴の若さに、章子は動揺していた。

「もっと割切ってるだろうよ。つまり年月に応じた退職金だからね。後座妻はそれをもらう権利があるのだ」

八

「お義姉さんではないけれど、あんなひとをお義母さんと呼ぶ必要のないことが、救いだわ。自分より年下なんですもの」

「それもそうだね」

と、直之も妻の調子に合わせて笑った。

「後座妻だから、当然妻のつとめもするんでしょうね」

「だから、父があのかつとを求めたのだ」

「いやあね、男って……」

しかし、直之には父が千晴に執心した気持ちがわかるような気がするのだ。ひと目みて、いやな感じのする女であつたならば、父に対してこれほど寛大な気持にはなれなかつたろうと思う。

「いくらでも若いひとと再婚が出来たでしょうにね」

「そりやそうだね」

「何か不自然よ」

「不自然だね、それはたしかだ」

美しい若い女の不自然な生き方ゆゑに、自分は、みとめてやりたいのだと、自分にもよく納得の出来ない直之の心であつた。

「しかし、あのかつとが来てくれたので、父のことは何も心配することがなくなった。ぼくはいいひとが父の面倒をみてくれることになつたと、むしろ感謝したいくらいだ」

狩野正毅と真弓が招かれてから、章子と真弓は千晴に対して敵陣を張るようになった。

「私のしてることだ。真弓や章子にちつとも迷惑をかけていないのだ。おせっかいはやかないでほしいんだよ」

と、父が直之に笑つていったことがある。

「若い義母が来たように思つてゐるんでしょね」

「後座妻は、生活の知恵ちえだよ。複雑になる人情を、金銭で

割り切つてゐるのだ。馬鹿な女たちだよ。せつかくの知恵を、人情ごつこにして、複雑にしてしまふというのだ」

直之も、同感であつた。

千晴が来たのは、今年のはじめであつた。

クラブの食堂で、一色宗有のそばに腰かけて、何かと世話をやいてゐる調子には、すくなくとも二、三年の経験があるように身についていた。

「あなた」

とは呼ばない。

「旦那さま」

それで自分が後座妻であることの垣根かきわとしてゐるようであつた。

直之に対して、後座妻の席からの態度であつた。ときにはそれがことさら冷淡に、距離を感じさせた。が、千晴としては、それ以外の態度がとれなかつたのであろう。人情としてもいつか狎なれ狎なれしくふるまうようになったとしても仕方のないことだが、千晴は一線を越えなかつた。すくなくとも直之には、そうみえた。